

ハツ撥 ※休止中

◆ **ハツ撥**
 御籤で選ばれた子どもが厳しい忌籠りを経て神に見立てられます。語源は「鞆鼓」という囃子とも、祭神の「八王子」を指すともいわれます。かつてハツ撥を山に乗せ、須佐神社まで社参していたと伝わりますが、近年では大人の肩に乗り社参します。

◆ **花傘**
 ハツ撥に付き従って邪悪な霊を祓う呪具とされます。花傘は1年の日と同数である365本の花から、花傘の中央にある心花は1年の月と同数である12本の花からなります(閏年は13本)。祭り最終日、須佐神社に大幣と共に心花を奉納し、祭り終了後、花傘は解体され町内や関係者などに配られます。花の先にはアズキが込められています。アズキは古来、腹痛や牛馬の病気、難産の時に効能があるとされています。

◆ **桶かぶり**
 奉納を終えたハツ撥は桶に入れた水で化粧を落とし神童から人へ戻ります。その水は神聖なものとされ、皆が桶の中に入ろうと激しく争います。最後に桶を3回まわして地面に伏せ今井祇園行事は終了します。



花見の座



ハツ撥と花傘



ハツ撥の川渡り



桶かぶり

◆ **元永山笠**

太平洋戦争によって中断した元永の山をNPO法人今井祇園祭・元永山笠振興会が平成30年度に再興したものです。古写真をもとに保存していた部材などで復元しています。今井西の山と異なり輪がなく、担ぎ上げて巡行する昇山です。担ぎ棒となる輿木は長さ13m、直径70cmある巨大なもので、祓川の川床に埋められていました。山の高さは約15m、総重量5.5tあり、その巨大さから「百人山」の別名をもちます。実際、担ぎ上げるには屈強な男たち120人以上を要しました。



今井祇園行事周辺マップ



今井祇園行事の流れ

7月15日頃	社頭連歌発句定め並び一巡、鉦おろし	大祭	7月末ないし8月初旬の金、土、日の3日間
7月21日頃	社頭連歌	1日目	提灯山曳き
7月下旬	ハツ撥御籤取り(休止中)	2日目	花見の座(花傘の披露) 車上連歌、夜祇園、元永山笠
7月下旬	注連立	3日目	町内花見の座、飾山曳き ハツ撥奉納(休止中)
7月下旬	輪上げ		
7月下旬	山建て		
7月下旬	車上連歌発句定め並び一巡(浄喜寺連歌)		

■ お問い合わせ ■

行橋市教育委員会 文化課

〒824-8601 福岡県行橋市中央1丁目1番1号
 TEL 0930-25-1111 FAX 0930-25-1582
<http://www.city.yukuhashi.fukuoka.jp/>

行橋市歴史資料館

休館日:火曜日(祝日の場合は次の平日)・8/15・12/28~1/4
 〒824-0005 福岡県行橋市中央1丁目9番3号
 TEL・FAX 0930-25-3133

福岡県指定 無形民俗文化財
 Intangible folk cultural property by Fukuoka prefecture
 いま い ぎ おん ぎょう じ
今井祇園行事
 Imai Gion Festival



[指定名称] 今井祇園行事(通称:今井祇園祭、今井祇園)
 [指定種類] 県指定無形民俗文化財
 [指定年月日] 昭和35年1月5日(無形文化財)
 昭和51年4月24日(無形民俗文化財)
 ※文化財保護法改正に伴う指定種の変更
 [伝承地] 福岡県行橋市大字今井・元永周辺
 [祭礼期間] 7月15日頃~8月初旬頃
 [主要行事] 連歌、山、ハツ撥

行橋市教育委員会

今井祇園行事

天下泰平、五穀豊穰、無病息災、厄除開運などを祈願して今井津須佐神社に奉納される夏の祭礼行事です。

中世、須佐神社のある元永から今井にかけて、今井津と呼ばれる湊があり、周辺の村々とともに豊前国の物流の拠点として、大いに栄えました。

今井祇園行事の起源は諸説ありますが、一説には建長6年(1254)今井津に疫病が流行った際、今井村地頭の福島氏と村上氏が牛頭天王(疫病除けの神)を祀る京都の祇園社(現・八坂神社)を勧請したところ霊験あらたかであったため、翌年から報謝として神事を執り行うようになったといわれます。主な行事は「連歌」「山」「八ツ撥(休止中)」で、7月中旬から約20日間かけて執り行われることから「廿日祇園」ともいわれます。また、大祭2日目の夜は「夜祇園」といわれ、夜市で賑わいます。現在、今井祇園行事は今井西祇園会によって継承されています。



中世の海岸線(Google earthより)



夜祇園

今井津須佐神社

旧称は今井津祇園社。豊前地方の代表的な祇園社で、「今井の祇園さま」として親しまれています。最初に祇園社が建てられた位置は定かではなく、天正年間(1573~1593)に戦乱を避けるため現在地に遷座したとされます。元永、長井地区の氏神を祀る大祖大神社(旧妙見社)と並んで鎮座しており、拝殿が共通していることからひとつの神社に見えますが本殿は別々となっています。非常に珍しい神社形態であり、二社あることから「ご両社」とも呼ばれています。

今井津祇園社は今井津にとどまらず広域の守護神としての性格をもち、北部九州各地に100を超える分社がありました。遠方からも数多くの参拝者があったため、道中には「ぎをんみち」と刻まれた道標が建てられ、現在も市内にいくつか残っています。江戸時代には8代小倉藩主小笠原忠嘉が病になると家臣が参拝し、その後、回復したため流鏝馬を披露し横額を奉納しています。

明治時代になると神仏分離令により仏教的性格を持つ「祇園社」の名称を変更する必要が生じました。牛頭天王はその荒々しい性格から日本神話のスサノオと習合していたため「須佐神社」と改称しました。しかし、分社は各々名称変更したため神社名は統一されませんでした。



須佐神社参道



須佐神社(左)と大祖大神社(右)

連歌

連歌とは複数人が長句(五・七・五)と短句(七・七)を交互に詠み連ねる詩歌のことで、句数は100句、50句、44句(世吉)等を単位として1巻とします。連歌は変化を尊ぶことから「式目(ルール)」にのっとり季節、景色、恋など神羅万象の句を織り交ぜて構成します。中世以降盛んになった文芸で、明智光秀や黒田官兵衛などの武将も嗜んでいます。

須佐神社への連歌奉納は享禄3年(1530)に始まるとされます。連歌が全国的に廃れた明治時代以降も今日まで継承されている希少な行事です。現在、今井祇園行事では世吉連歌2巻を奉納しています。

◆社頭連歌発句定め並びに一巡

かつては六頭(古くから今井祇園行事を執り行う有力者)の筆頭である福島家で開かれましたが、現在は今井の氏神を祀る熊野神社で開かれます。ここでは連衆が順番に1句ずつ詠み、一巡した後、祇園牛頭天王の神軸に向かい披露します。披露終了と同時に「鉦おろし」を行い、鉦の音を今井津に響かせることで今井祇園行事の始まりを告げます。

◆社頭連歌

熊野神社で一巡した連歌の続きは後日、須佐神社で開かれる社頭連歌に引き継がれ、世吉連歌を1巻完成させ須佐神社社殿に披露します。

◆車上演歌発句定め並びに一巡(浄喜寺連歌)

今井の浄喜寺で開かれます。浄喜寺の開祖村上良成は六頭の一人で、村上水軍の系譜をひくとされます。ここでも連衆が1句ずつ詠み、後日、車上演歌に引き継がれます。

◆車上演歌

大祭2日目に今井西の山を舞台にして浄喜寺連歌の続きが詠まれます。山には宗匠と執筆が座し、その下で一般の参拝者が即興で句を詠み継ぎ世吉連歌を完成させます。全国的に珍しい「笠着連歌」であり、匿名性を高めるため夜に行われます。ここで2巻目が完成し須佐神社の方角に向かい披露します。



社頭連歌発句定め並びに一巡



車上演歌発句定め並びに一巡(浄喜寺連歌)



鉦おろし



車上演歌

山

かつて今井祇園行事では「今井東」「今井西」「今井中須」「金屋」から曳山(車輪がついている山)が、「元永」「真菰」から昇山(担いで巡行する山)が1基ずつ、全部で6基が巡行していました。しかし、太平洋戦争などにより中断が相次ぎ、現在は今井西の1基のみ巡行しています。

山の構造は二層吹抜屋形四輪式で、京都祇園祭の流れを汲みます。2本の柱がそびえ立つ特徴をもち、高さは約15m、車輪は楕円で直径約1.5m、幅約55cmと大型のものです。普段、輪は祇川の川床に埋められており、7月下旬に行う「輪上げ」で掘り出します。その後「山建て」が始まります。

大祭1日目は「提灯山」として巡行します。戸畑祇園などのように小型の提灯を多数掲げるのではなく、大型の提灯を少数掲げることが特徴で、提灯山の古い形態と考えられます。

大祭3日目には「飾山」として巡行します。提灯は取り外され、代わりに胴幕を張って彩ります。勇壮な鉦や太鼓の囃子にあわせて繰り広げられる山曳は圧巻です。



今井東町の曳山(昭和5年ごろ)



輪上げ



山建て



提灯山



飾山